



# FIGU - Landesgruppe JAPAN

## フィグ・ランデスグルッペ・ヤープン

Internet: <http://www.jp.figu.org>

E-Mail: [info@jp.figu.org](mailto:info@jp.figu.org)

### FLJ 通信

第5号

発行：2015年5月19日

## 編 集 手 記

先日、ようやく私達の課題であったWebサイトが再開されました。運開後には沢山の読者の方から、お祝いのお言葉を頂きまして本当に有り難うございます。この場をお借りして御礼申し上げます。

私達も、Webサイトの機能やコンテンツは最低限の構成に留まっている事は認識しております。今後の新しい課題として、機能改善やコンテンツ充実に取り組んでいきたいと思っておりますのでご期待下さい。

Webサイトが再開した4月か

ら、一時的に書籍配布の申込みが多くなっています。私達も運開によって業務が一時的に忙しくなる事は予測していたのですが、実際に書籍の配布遅れやミスが何件か発生してしまい、一部の申し込み者の方には、大変ご迷惑をお掛けしてしまいました。現在、申込数が落ち着いてきており、私達も間違いの無い効率的な配布活動に日々、務めていきたいと思っております。

2015年度の活動計画が承認され、私達は元気よく第4期目の活動を開始しました。昨年

はKDWの公開に活動を集中させるために、幾つかの作業の優先順位を調整し、結果的に小冊子などの印刷まで至りませんでした。既に何冊かの小冊子について翻訳が完了しており、校正作業の手続きを経て順次、印刷・配布を開始できるように努力しております。

私達は目の前に山積するミッション業務を成立させるために、内部で忙しく働くメンバーの努力もさることながら、多くの友人の方々のお力をお借りして、全体のミッションが成立し

ています。本年度も幾つかの新しい活動を計画しておりますので、今後、準備の進み具合に応じて、読者の皆様にご周知させて頂きたいと思っております。ご期待頂ければと存じます。

小林 裕昌

## FLJからの諸連絡について

### (1) 新しい小冊子の配布について

大変にお待たせしていましたが、新しい小冊子「ノコデミオンの全7つの祈りの形」が印刷を終えて6月1日から配信可能となりました。詳しい情報は小冊子の紹介をご覧ください。

### (2) KDWの進捗について

「Kelch der Wahrheit」の遅れについて御報告します。4月を目標に部分公開(1章、2章)に向けた最終的な作業を2015年1月から始めておりましたが、皆様により読みやすくなるように、校正方針の変更を行いました。このために作業量が増加してしまい最終的に4月中の公開が難しくなりました。現在も支援者の方の支援を

頂きながら公開に向けて淡々と作業を続けております。新しい公開予定の見込みがついた段階で、FLJ通信等、及びWebサイトにて御報告させて頂きたいと考えております。

この遅れに伴いまして「KDW勉強会」の開催についても順延させて頂きますが、参加希望についての申込みは受付しておりますので、お気軽にお声かけください。

### (3) 地域活動の起ち上げについて

引き続き勉強会の設立に向けたサポートを継続させていただいております。読者様の生活圏での有志による勉強会活動の積極的なサポートを実施していく予定ですので、お気軽にお問い合わせください。

### (4) Webサイトでのダウンロードについて

現在、私達の新しいウェブサイトで開催されているダウンロード入手可能な資料として、FLJ通信を始め様々な資料をご利用いただけますが印刷物の配布後に行う公開用の編集作業に概ね1ヶ月程度のお時間を頂いております。

このため、一日でも早く、情報の入手をご希望の方は、読者登録をご検討ください。読者登録はWebサイトの登録ページを始めインフォメールにて受付しておりますが、その他FAXや電話、又は葉書などを八王子ハウスまでお送り頂いても可能です。

以上

## FIGU特別公報86号からの抜粋

FIGU-Sonder-Bulletin Nr.86<sub>P1-P3</sub>

[Eine notwendige Klarstellung in bezug auf Meinungsfreiheit, Pressefreiheit, Islamismus und <Islamismus sowie Islamischer Staat und <Islamistischer Staat>]

「意見の自由と報道の自由、イスラム教と“イスラム主義”、およびイスラム国家と“イスラム主義国家”について明確にすることの必要

意見の自由と報道の自由は、人間の名誉と尊厳およびその信仰と

信仰価値、たとえば預言者を侮辱し、中傷し、ダメにする事とはおよそ関係ない。

そのような事が絵やイラストや言葉で為されてはならず、漫画や戯画や風刺の観点からも行われてはならない。

しかしながら洗練された礼儀と敬意、名誉と尊厳を守る形で全てが現実と真実に即しているのならば、あらゆる点で揶揄や冗談も許されている。

だが、現実性と真実がおざりにされ、侮辱や嘘または中傷や屈

辱など、つまりいかなる場合も正当化されない攻撃が用いられたら、それはもはや率直に意見を述べることは無縁である。

オープンで自由な意見を述べるとは、現実と真実の本当の事実が絶対明確 [クリア] に、率直 [オープン] に、そして完全に中立的に告げられ、それによって実際の事実関係だけが明らかにされうることを意味する。

しかし正に、この事が一般に市民自身によっても、ジャーナリストや新聞、雑誌やマガジンなどによっても行われることはなく、従ってこの点においてもいわゆる意見と報道の自由が濫用されている。それというのも「報道」等は、一方的に一つの方向だけに偏り、双方の側が標準的、中立的に扱われて評価されないからである。

実のところ、ひたすら自分の「権利」と自分の「意見」を主張することを目的とし、従って攻撃的であり、自分自身で現実と真実の本当の事実を考えようとしないうちに同調者のな集団に、国民が非中立的に与するならば意見と報道の自由は一般に国民によっても濫用される。

今、正にそれが風刺新聞“シャルリー・エブド”の策謀に関して起きているのである。なぜなら国民大衆は全員一致でひたすらそちら側に味方し、同様にイスラム教とその信者と預言者を中傷しているからである。

彼らはオオカミのような人種差別主義者に合わせて遠ぼえしているに過ぎないのであり、人種差別主義者は漫画家や戯画家、風刺作者として意見・報道の自由と称するものにむごい仕打ちを加え、それを利用して誠実なイスラム教徒

とイスラム教を侮辱して、その預言者を台無しにする一方で、変節した残忍なイスラム主義者を激怒させ、暗殺や殺人に駆り立てている。その結果、遺憾なことにパリで変節したイスラム主義者の残忍な行動が起こり、多くの人命が失われたのである。

今や、憎しみの種を撒けば、再び憎しみによって反撃されるといえるのは事実であり、それはまさしくパリで、後からベルギーでも証明された。

そして国民がそのような事件を中立的に見ることができないように、一般にジャーナリストにもできないということは事実である。というのも常に一方の側だけが歓声を送られ、他方の側は弾劾され呪詛され、双方の真の事情や事実や背景 [背景] を、絶対に中立的に観察し評価することはないからである。

そうすることによって、単純に一方的で非中立的な意見が形成され、それが全力で主張されて擁護され、ついにはそれが正しいか正しくないかはどうでも良くなる。

こうして一方的な意見が「高揚され」、それによって一方の側は歓呼で迎えられるが、他方の側は徹底的に弾劾される。事実を現実と真実に従ってあるがままに見て言い表し対処するために、全てが中立的に見られて扱われるということは無いのである。

これが為されないのは“シャルリー・エブド”の一例でも証明されたとおりであり、この件に対して未熟で見境もなく闕の声を上げているが、変節したイスラム主義者が残忍な攻撃に及んだ惨事全体の責任は人種差別主義的なテロ的風刺新聞にある。

だがここで問われるのは、闕の声を上げて“シャルリー・エブド”に大歓声を送っている国民がどの程度に悟性と理性を備えているか、それとも全く馬鹿になっているのか、ということである。なぜなら国民は一方では現実と真実を知覚できず、故に認識も理解もできないからであり、他方、ある事柄を(それがどのようなもので何であろうと)完全に中立的に観察して評価することが、絶対にできないことは全く明らかだからである。

更に言うておこななくてはならないが、国民は(少なくとも、その大多数は)オピニオンリーダーに感化されてあっさりと同調者と成り、当の事柄が正当であるのか不当であるのかは、どうでも良いのである。

そのとおりであることは“シャルリー・エブド”および“ペギーダ” [PEGIDA: 西洋のイスラム文化に反対する欧州愛国者] に対する同調が証明しており、いずれも誤った意見の自由と、報道の自由により人種差別主義とテロを広めることを目指しているが、それが新たな人種差別主義とテロ行為に繋がることは疑いがない。

この事を把握も理解もできない人間は、知性の点で本当に貧しく自分の悟性と理性の高みにはいない。

さて、イスラム教と「イスラム主義」および「イスラム国家」と「イスラム主義国家」に関して、次の事を明確にする必要がある。イスラム教は、誠実な信者によって育まれているイスラムの宗教に実際に根ざした信仰傾向であり、預言者ムハンマドに対する畏敬の念と関連している。

このような意味と事実に従い、イスラム運動は「イスラム教」、対

応する国家は「イスラム国家」と呼ばれる。

しかしながらここでイスラム教に関係していると自称する原理主義的で、狂信的で、残忍で、過激な一部を見るならば、このイスラム教からの敵対的な分裂はもはや「イスラム教」と呼ぶべきではなく、「イスラム主義」と呼ぶべきである。実のところイスラム国家ももはや存在しえず、拷問、殺人、テロ、強姦、破壊の上に築かれた「イスラム主義国家」があるのみである。

それゆえイスラム教と「イスラム主義」、従って誠実なイスラム教信者と残忍なテロリストのイスラム主義者は、言葉によっても文字によっても区別されなければならない。

イスラム主義者とは、イスラムの教えに背き原理主義に染まった狂信的、過激で残忍な急進主義者であり、イスラム教と信仰の厚い真のイスラム教徒の評判を悪くし、それどころかイスラム主義教派に属さなければ虐殺するのである。

イスラム主義者は彼らの生活、行動と行為、そして全ての振る舞いも予言者ムハンマドの実際の教えに従って律していない。というのも彼らは根本的にその本当の教えに邪悪にも違反し、従ってそれを無視して台無しにするからである。

いよいよ「イスラム教」と「イスラム主義」および「イスラム国家」と「イスラム主義国家」の違いを明らかにし、人々がはっきりと理解できるようにすべき時がきた。というのはその必要性は時間が経つにつれていよいよ急を要するからだ。それは人種と宗教を憎む連中、たとえば“シャルリー・エブド”と“タイタニック”<sup>【ドイツの風刺週刊誌】</sup>などにより、そしてまた“ペギーダ”運動により、人種的憎悪およびイスラム教徒憎悪（最近では再びユダヤ人憎悪）も助長されており、非常に良くない結末をもたらす恐れがあるからである。

その際、前回の世界大戦でユダヤ人憎悪とユダヤ人絶滅に関して

何が起きたか思い出ささえすれば良い。これについて、未熟な国民は明らかにそこから何も学ばなかったと言わねばならない。少なくともイスラム教徒やユダヤ人に対する扇動のために人間の名誉と尊厳および信仰などを、欺まんと嘲笑、虚偽と破廉恥、誹謗と中傷によって台無しにしている一部の国民はそうである。

ここでは罵倒され、笑いにされ、誹謗され、不当に攻撃されたこれらの人々がなおも生きているか、それとも既に死んでいるかは重要ではない。それがつい最近の事か、それとも数百年あるいは数千年前の事であるかも関係ない。

SSSC、2015年1月17日、  
15時33分  
ビリー

## FIGU特別公報86号からの抜粋（606回公式コンタクトからの抜粋）

FIGU-Sonder-Bulletin Nr.86<sub>p3-p11</sub>

[Auszüge aus dem offiziellen 606.Kontaktgespräch vom 3.Januar 2015]

※おことわり  
606回公式コンタクト記録を掲載する予定でしたが、この記録は上記および下記の607回公式コンタクト記事と関連する記事

となっております。  
私達は原稿の集中的な校正作業に連休の連日を費やし精鋭努力いたしました。残念ながら本号に間に合わすことができませ

んでした。次回以降の刊行物に掲載させていただきます。

## FIGU特別公報86号からの抜粋（607回公式コンタクトからの抜粋）

FIGU-Sonder-Bulletin Nr.86<sub>p11-p14</sub>

[Auszüge aus dem offiziellen 607.Kontaktgespräch vom 12.Januar 2015]

2015年1月12日、607回  
公式コンタクトからの抜粋

ビリー:... というのは、1月3日に我々の606回公式コンタクトで悪質なテロリストまがいの漫画や戯

画や風刺について話したが、それらは名誉、尊厳、宗教、そして人間をも傷つけ、侮辱し、台無しにしており、それはもっと良くない結末をもたらすだろうと言ったことについて君と語りたからだ。

それは我々が会見の時に考えていたよりも早く起きた。

確かに我々はそのような事がすぐにも、つまり極めて近い将来に起こるだろうと確信していたが、それは早くも4日後に起きてし

まった。我々は本当にその事を知らなかった。なぜなら我々はこれについて計算も予測も行わなかったからだ。

それが実現したことについて、我々が話したのは、ただ私の中にそれに対する欲求や衝動があり、遠からず何か凶悪な事が起こるだろうということが、私には明白だったからだ。

よりもよってパリの風刺新聞“シャルリー・エブド”がテロ攻撃に見舞われたというのは、いわば摂理<sup>せつり</sup>によって起きたのだ。それがイスラム教に敵対的な戯画やスローガンをまき散らしており、そのためまさしくイスラム教とイスラム教徒に対する扇動ビラと化しているこの新聞だろうということを私は知らなかったし、予感さえもしなかった。

この新聞もしくは新聞屋兼戯画家の全行動と行為を観察して分析するならば、同紙がやっているのはイスラム教とイスラム教徒と預言者ムハンマドに対するテロ行為以外の何ものでも無いということがわかる。

この責任者達は、このような事を法律によって裁かれて罰せられることもなく為すことができる。というのも彼らには反対に警察の保護が与えられ、未熟な国民から歓声を贈られているからだ。その国民は、“シャルリー・エブド”の行為によってあらゆる秩序とイスラムの秩序が支離滅裂になり、否が応でもイスラム主義者やその他のテロ分子によって暗殺が引き起こされる事を知らないのだ。

しかし私がこの風刺新聞の名前を挙げたのは、ムハンマドに対するタチの悪い風刺の為にちょうど記憶していたからに過ぎない。

実際に私はこの新聞、もしくはそこで働いている人間が目前に迫っている殺人の、第一の標的になるということは知らなかった。そうなったのは、彼らがイスラム教に敵対的な戯画やスローガンでテロリストの活動を促し挑発したからである。それというのも、まさしく彼ら自身が人種差別主義的なテロ行為をしているからだ。

ここで言うべきは、「憎しみとテロの種を撒けば、再び憎しみとテロが刈り取られる」ということである。

私に明確に意識されていたのは、原理主義的、狂信的、過激なイスラム主義者は遅かれ早かれ、おぞましい戯画や漫画や風刺でイスラム教徒の信仰と信仰価値を中傷している連中をこき下ろし殺害するだろうということだ。

そしてこれは他の宗教や信者やそれらの信仰価値についても、同じスタイルで、宗教と信仰と信仰価値に関して一切が侮辱されて、台無しにされたら当てはまることである。

しかし実のところ私は何が起こるのか全く知らず、予感したに過ぎない。君もこの事件の予備知識を持っていなかったし、予測もなかったね。

**プター:**私のほうでも全体に関する知識は持っていなかった。なぜなら私はこれについて実際に予視しなかったからだ。だが、何かが起こる事は本当に予想されていたし、そのようなテロ攻撃が行われて人命が失われることも予想されていた。

だが、1月3日に我々が話したことがそれほど速く実現されるということは考えてもみなかった。

**ビリー:**パリにおける攻撃に対して世界中で起こった反応を、全てを正しく観察するとそのような出来事がわずか2日間で2回、それどころか3回あった事は注目に値するが、それはやはり非常に遺憾なことだった。というのもパリの追悼デモに参加した多くの者は、外国人、異邦人、イスラム教、イスラム教徒および人種に対する憎悪に関する自分達の野心を、間違いなく追悼デモで密かに、または公然と発揮できたからだ。この追悼デモは本来、殺された人々に哀悼の意を表わすとともに、残酷なテロ行為に対する抗議として企画されたものだ。

しかしまた別の人間は明らかに、公の場に登場して自国の国民や国際社会に好印象を与える目的のためだけに追悼デモに参加した。これは特に特定の国家権力者やその他の統治者に言えることであり、彼らは最前列でいかにも悲しそうな顔つきで一緒に行進することによって注目され、ジャーナリストから写真を撮られ、そしてテレビでは「悲しみを共にする」国家権力者等として人目を引くことができた。

私が新聞やテレビで非常にじっくり見たそれらの写真や動画のことを考えると、国家権力者やその他の統治者の顔と表情に、しかしまた種々の「普通の」民衆の追悼デモ参加者にも誠実な追悼とは似ても似つかないものを見ることができた。

私が見て観察した顔はしばしば悲しみではなく、むしろ不安と憎しみが刻まれていた。これと同じ表情は、ドイツの“ペギーダ”運動の外国人、異邦人、イスラム教、イスラム教徒、人種および宗教に

対する敵意に関しても見られるが、その運動はそうした憎悪者によってスイスでも誕生しようとしている。しかし実のところそれは単に外国人、異邦人、イスラム教とイスラム教徒、別の人種および他の宗教に対する敵意ではない。全体の背後には過激主義の、さらにはテロ行為のファクターが潜んでいるのだ。

このファクターが目指していることは、“ペギーダ”運動の合唱に同調して吠えている信奉者には知覚できないが、イスラム教とイスラム教徒だけでなく、その背後でユダヤ教とユダヤ人も攻撃して迫害することだ。

これは1930年代に人類に対する犯罪者アドルフ・ヒトラーが実権を握った時に全く同じやり方で起こった。彼は正にその方法で国民を自分のまわりに集めてユダヤ人にけしかけたが、それは今“ペギーダ”運動がイスラム教徒にしているのと同じだ。

だが、これらの人間はなんと未熟で、さらには愚かで愚鈍なことか。彼らはこの極端な憎悪運動に加担しながら、そこで本当に何が進行しているか、今どんな事態にあるか、そして“ペギーダ”運動の創始者ルッツ・バッハマンが本当に企んでいるものが何であるかに気付いていないのだ。

ここで問われるのは、“ペギーダ”運動に加担しその目標との声を上げている全てのドイツ人は、ユダヤ人に対する大量殺害もしくはジェノサイドが行われ、アドルフ・ヒトラーとその大量虐殺犯達が、数百万のユダヤ人と全体で六千万以上の人間を殺害した最後の世界大戦から本当に何も学ばなかったのかということだ。

“ペギーダ”創始者の背後に別の思想的創始者がいたことは、インターネットの抜粋からも明らかだ。

この土曜日に出た情報誌“シュピーゲル”の最新号は、ドレスデン出身の10人のペギーダ創始者を何人か取り上げた。その中には挫折したCDU [ドイチュマルク] 市議員から元ハムム経営者までいる。

警備会社の社員ジークフリート・デープリッツも初期のペギーダの思想形成に関与した。

この39歳の男はFacebookにアドルフ・ヒトラーの引用文を投稿してイスラム教徒を罵倒した。

彼は「イスラムステート」(IS)のテロと戦うクルド人について、「彼らは回教徒内の他の全ての動向と同様に文明化されたヨーロッパ/ドイツにとって大きな危険である」と書いた。

もう一人のペギーダ活動家は、マイセンの元CDU市議員のトーマス・タラッカーだ。

その人物について彼の知人達は“シュピーケル”に対してこう言った。「世界像がしっかりしておらず他人の言動に惑わされやすい。だが、彼はネオナチだ。」

#### 名称をめぐる争い

すでに2013年夏、タラッカーはFacebook上で難民申請者に対する反感を煽っていた。

「我々は、90%が無教養であるならず者に、何をしようというのか。今やっているのは失業手当(ハルツ第IV法)を与えて我々の福祉国家を疲弊させることだ」とタラッカーはその時、投稿した。

ある傷害事件の後、彼は「発達障害があるか、断食のため飢えかかったトルコ人は、きっとまたし

でかす」と推測した。

党はついに市議員を辞職するよう要求した。

Facebook上の議論が示すように、メンバーは最初から名称について一致していなかった。

当初ペギーダは「西欧のイスラム化に反対する平和な欧州人」とすることになっていたと“シュピーゲル”は書いている。

しかしこれは多くのメンバーにとって締めりが無過ぎた。

コメントの一つは「この名称はあまりに感じが良く、善い人の集まりのようだ。そんな必要があるのか？そもそも平和的である必要があるのか？欧州人？自分はドイツ人だ…国家こそ相応しい言葉だ」と述べられた。

インターネットにはこんなことも載っている。

「西欧のイスラム化に反対する欧州愛国者」(ペギーダ)も、風刺新聞“シャルリー・エブド”に対する攻撃の故に本日、月曜日ドイツの複数の都市で喪章を付けた決起集会を呼びかけた。

ハイコ・マース連邦法務大臣はこれを偽善的を見た。「ドレスデンでは腕に喪章を付けた人間達が、つい一週間前に“嘘つきメディア”と自分達が罵ったパリの犠牲者を追悼しようとしている。」

彼は日曜日に、「犠牲者はそのような扇動者に濫用されるべきではない」として主催者にデモの中止を求めた。

「文明化されたヨーロッパ/ドイツにとって大きな危険」

この言葉で簡潔に言うべきことが本来、全て言い尽くされている。だが、さらに考えるならば、一言

付け加えるべきだろう。それは“ペギーダ”運動は、彼らが自称しているような自由な意見の表明とは無縁だということだ。

そしてそれはまた自由なまことの民主主義を追求することとも無縁である。というのも実のところ“ペギーダ”運動は外国人と異邦人およびイスラム教とイスラム教徒に敵対的だからであり、そのことは次の短いインターネットの記事からもわかる。

特にペギーダ（「西欧のイスラム化に反対する欧州愛国者」）のビジョンで問題となるのは、彼らには気に入らないドイツの難民政策である。

ペギーダはほとんど毎回演説の度に「我々は戦争難民の受け入れには賛成だが、経済難民の受け入れには反対する」と言い、歓声と拍手を浴びている。

「さらに我々はいかなる少数派も、彼らがどこから来ようと、我々の元で暮らし、働き、食べようとす意志があり、そしてドイツ語を話し、我々の法律と文化に敬意を払うならば拒むことはない。」

そして次のように組み立てる。「我々は入国管理を厳しくし、たと

えヨーロッパ内でも国外追放を強化することを要求する。」

ペギーダが信徒を獲得するための言葉であり、ハーメルンの笛吹き男のようにますます多くの人間がペギーダ、もしくはその言葉に付いていく。

それ故、全てを正確に観察するならば、何よりも重要なのはイスラム教とイスラム教徒に対する敵意と憎しみであり、これは「西欧のイスラム化」という言葉からも明らかだ。

そのため“ペギーダ”によってイスラム教徒と彼らの信仰およびイスラムの宗教が攻撃され、侮辱され、憎まれ、その際に偽善的にもイスラム主義者の残忍で、狂信的で、過激な、原理主義的な策謀が引き合いに出されている。

しかしこれらのイスラム主義者は実のところ真の誠実なイスラム教徒とは無縁であり、イスラム教徒のほうもイスラム主義の殺人者や犯罪者と関係を持つとは思っていない。それらがIS民兵テロリスト、アルカイダ殺人者、またはその他のテロ殺人者ネットワークに属しているか、あるいはテロ行為に関して単独の急進主義者であ

るかにかかわらずだ。

さらに“ペギーダ”に関して言うと、理性的な人間なら誰も考え及ぶことだが、この運動は背後で全ドイツ国民を（この頃は可能な限りスイス国民も）魅了することを目指して努力している。

そして、これはあってはならない事だが、官庁や治安部隊や情報機関などが適切に対処しないために、実際にそれが成功したなら、ヨーロッパではEU独裁の影響よりさらに酷い新たな害悪に脅かされるだろう。

これについてドイツとスイスの責任者達は徹底的に熟慮し、破局を阻止するために適切に対処すべきだ。

そうしなければ、“ペギーダ”の反ユダ主義的の扇動的長広舌ちょうこうぜつによりイスラム教徒迫害、そして非常にあり得ることだが再びユダヤ人迫害が増大する。

プター、そして君がどう思うか？ 私はそれが知りたい。

**プター:**君が言ったこと、そしてまたインターネットから抜き出した全てに同意するのみだ。

**Fehler sind wie riesige Gebirge, deren Gipfel der Mensch selbst ist mit all seinen eigenen Fehlhaftigkeiten, die er seinen Mitmenschen völlig schamlos sowie reuelos in die Schuhe schiebt.**

SSSC, 14. März 2012 00.23 h, Bily

過ちとは、「巨大な山脈の頂上を極めても、その人間が自分自身のあらゆる過ちを犯す事から免れない」という事のごとし。この事をその人間は全く厚かましくも、そして後悔の念もなく、他人にその責任をなすりつけるのだ。

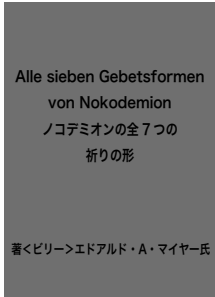
SSSC 2012年3月14日 0時23分 ビリー

☆理解のポイント

“巨大な山脈の頂点を極める”という表現は、スイス地方では「人が大きな成功を納める」ということと同義だそうです。…どのような成功を納めても謙虚に学ぶ姿勢を失うこと無く、学び続けなさい… (FLJ勉強会より)

## 小冊子「ノコデミオンの全 7 つの祈りの形」についてのご案内

**新**しい小冊子の出版をご案内いたします。  
新しい小冊子はノコデミオン氏に由来する 7 つの祈りの形を全て紹介しています。



サイズ:A5 配布価格300円 重量:50g  
配布開始:2015年6月1日より  
付録:A4サイズ額縁用祈りの文言付き

祈りの言葉は地球人の進化に合わせて、その都度開示されてきましたが本誌にその理由が書かれています。

また、自身に肯定的な影響力を発するドイツ語原文による祈りの唱和について、読者の皆様にもドイツ語で楽しく称えていただけるように、本誌から切り離して利用が可能な 7 番目の祈りを、読み仮名付き（裏面に原文あり）で付録

として付けました。本誌とは別に A 4 用の額縁をご自身でご準備して頂くことによって綺麗に壁などに飾ることができるようになっております。

この小冊子は、東京 S G の皆様に校正協力を頂きました。ご協力にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

以下、本文より一部抜粋・・・

これらの祈りは昔から、意識の代わりにまだ〈霊〉という概念を使っていた人間の初期の理解力に合わせて使用方法、もしくは利用方法として与えられていた。

これらの祈りの形は、古代から新時代にまで続いているが、新時代では人間には意識という概念を理解する力が与えられている。新時代の最初の時期においては祈りの中でお常に〈霊〉という概念が使われていたし、また使われているが、それは古くからの誤った理解に相応したもので、本来は意識を意味している。だが、いまや時が熟して、正しい形が称えられる。なぜならば現代の人間はますます、霊ではなく意識が根本的な因子であり、それから思慮深さや豊かな着想などが生まれるという理解に達しているからである。

### 「体面を傷つける敵対的な振る舞い」※601回公式コンタクト記録(速報)からの特別記事

前回の F L J 通信特別 1 号でご紹介した米国の F I G U 活動家であるマイケル・ホーン氏の「イスラム国に関する呼びかけ文」の記事について、日本の読者の皆さんに紹

介することをビリー氏に報告したところ、ビリー氏より「こちらの記事もどうだ」との提案を受け、(速報版)のコンタクト記録を翻訳／校正しましたのでご紹介します。

この記事は F I G U 特別公報 8 8 号に掲載されましたが、本号の翻訳文は公報記事用の校正を受ける前の速報版を元にしております。

2014年11月10日の601回  
コンタクト(速報版)より抜粋

**ビリー:**…西側がロシアを再び(昔から長らくそうしていたように、そして現在でも再びそうしているように)敵と見なしていること、これをそもそもどう考えるかね?

私はこれについて調べてみて、非常に学ぶところの多い新聞記事で幾つかのことを読み、他の重要な情報を集めてみたのだよ。これは、いわゆる普通の市民には恐らく知られていない情報だ。

つまり私は、ロシアの歴史と、ロシアが西側の国々とその権力者たちに、昔から恐れられ、また、

侮辱されてきたということに関連して、幾らか知識を得たのだよ。“冷戦”もまた、世界中で非共産主義国家が「ロシアを見放せ」とがり立てていた間、そのように形作られていた。

同様に現在もまた、ロシアの明白な敵に、扇動のために再び大きな余地が与えられている。これは特に、独裁 EU、アメリカの他、ウクライナ国内、グルジア国内、バルト三国内のロシアを憎む勢力によって行われていて、彼らは、「ロシア国民が戦争をしたくてウズウズしているのだ」と言い張っている。

不安と小心さの結果として、そ

して独裁 EU の権力者たち(特別な役割を果たしているのはその中でもドイツの権力者たちだが)の、途方もなく腹黒いレトリックによって、愚かで馬鹿げた、犯罪的で無責任なやり方で、狂気の沙汰だが、“冷戦”を再び現実のものとしようという努力がなされていることは明白だ。

**プター:**君が言っていることは、現在、本当に再び起きていることだ。

しかし、全体の根は、理解のない普通の人間の目に全般として見えるよりも、もっと深いところにある。というのも、君が言う通り、全ての基礎は、ロシアの敵対者の

もとに昔からあったからだ。この敵対関係は広く、特に西側の人々の間に、21世紀の今日に至るまで持ち込まれている。

“冷戦”も、ロシアと西側、並びに西側と結託している他の国々との間にある対立が、著しく悪化した結果だった。前世紀、この敵対関係はイデオロギー的理由から存続し、新たに構築されてきた。その際、西側陣営においては資本主義が、ロシアとその附属国家あるいは歩調を合わせる国家においては共産主義が、主な理由として前面に押し出された。だがそれは、無責任な見せかけにすぎなかった。それは、実際にその後、東側陣営が崩壊した際に明らかになった。そして、かつてソ連邦を構成していた数々の小共和国は、あっという間にロシアに離反し、西側に、つまりヨーロッパとアメリカについたのだ。

しかしこのことで必然的に、西側についた旧東側諸国はロシアからかけられる圧力が増す一方だと感じるようになり、一部は武力をもってロシアによる自国領土への介入に抵抗する結果となり、旧ソ連邦諸国において、様々な形でロシアとの武力衝突が起きるということに繋がったのである。

**ビリー:** “冷戦”とは、私の理解によれば、西側諸国とロシアの間に昔からあった敵対関係の結果にほかならない。私は、これら二つの陣営の間の険悪な関係は、昔から常に、敵対者と権力に飢えた者によってコントロールされてきたと考えている。根本的には、まさにヨーロッパとアメリカによってコントロールされてきたのだ。

当然ながらこれは、ロシアと西

側諸国との間に否応無しに不信感も生み出してきた。それに当たっては、東側と西側で異なる宗教も、汚いやり方で首を突っ込み、争いをもたらしてきたと私は考えている。

この点については、西側とロシアの宗教的・民族的文化の間には、根の深い非常に大きな文化的な違いが存在するという事実も、考慮に入れなければならない。そしてこれは、今日でも同様だ。従って、この点においても、無理解と民族間の相互憎悪などによって生まれる敵対関係は、昔から日常茶飯事だったのだ。

たった一人の人間、例えば宗教的あるいは政治的権力者が、その常軌を逸した狂気じみた演説と狂気じみた見解で大勢の人間を扇動し、味方にする事ができるということを考えれば、これは不思議なことではなく、現在でもシリアやイラクのイスラム国(IS)で実際に起きていることだ。

ソ連から解放された国々が西側についたこと、そして今でもついていること。それも、その獲得した自由と独立を守ったあるいは守る代わりに、アメリカと、特に独裁EUについている、ということに関して君が言ったことが、ロシアに対する不信感と敵対感を生み出す新たな土台であることは、今も昔も変わらない。そしてロシアは、当然のことながら、ぞんざいに扱われていると感じ、全ての西側世界から切り離されていると感じているのだ。これはその昔、タタール人による支配を受けていたときも同様であった。タタール人支配は、私の知っている限り、私の記憶が正しければ、11世紀に盛んになり、15世紀になってようやく再

び終わりを迎えた。モスクワを中心とした権力あるいは帝国が樹立されたときだ。

この権力は確立後、領土を急速に広げたため、これが新たな原因となって、ロシアとロシア人に対する不安、そしてロシアを敵と見る見方が、またしても西側の国々に生まれることになった。ロシアとロシア人は、特に16世紀、野蛮で残酷であると罵りを受けることになった。

東方キリスト教会と西方キリスト教会がお互いにいがみあい、ロシアの政策と西側の政策も一致しなかったため、ロシアは、キリスト教世界と西側諸国の政治にとっても、また西側の軍隊にとっても、暴虐な敵として様式化されたのだ。ロシアが帝国主義であると非難されたのは、ロシアが志を同じくする者をバルカンとアジアの様々な国で集めた結果であり、これがもちろん、西側諸国の国益に反することだったからだ。

さらに西側諸国は、ロシアの国内問題に介入し、ロシアの国内制度に難癖をつけた。

そして、ロシアの拡張主義も非難の対象となったのだが、一方で西側の拡張主義には言及すらなかった。特に、アメリカが以前からずっと実践し続けていた拡張主義すらも、おとがめなしであった。アメリカという国は、世界中の多くの国々に居座り、これらの国々を自らに依存させるということをやってきた国で、これは今でも行われている。

ロシアは、昔から恐らくは専制政治に分類される国であった。従って、名目上の権力、ないしは形式上の権力は、一人の支配者のもとにあったのだ。



これは、政治の動きに個々の市民が関与・参加することを許そうという努力をする国々がヨーロッパで増え始めた、19世紀末においても言えることで、ロシアは旧来の専制政治体制を引き続き固持していた。そしてこのことは、もちろん、ロシアを襲っていた意識面・社会面・経済面でのダイナミズムとは相入れないものだったのだ。結局、1917年、この全てが革命に至ることとなり、その結果、必然的に、西側が望んだものとは異なる政治的な道が開かれることになった。

そしてロシアと東側諸国はそれまでも増して疎遠な存在となり、その状況は第2次大戦が終わり、東ドイツが占領されるという結果になったとき、さらに悪化した。そして、そこに最終的には“冷戦”という結果も続いたのだ。また私は、既に知っていたことではあったが、超大国ソ連の崩壊と、イデオロギー対立の終了とともに、西側諸国間の関係に短期間で変化が生じたことについても理解していた。

ソ連の終えんにより、ソ連は西側にとって、不安な存在としての本質を失った。なぜなら1990年代以降、ロシアもまたあらゆる点において弱体化し、もはや強力な敵とは見なされなくなったからだ。

それによって、西側には新生ロシアに対して奇妙な形の共感が生まれた。ところがこの共感、ウラジーミル・プーチンが権力の座につき、この人物が、真偽の程は

どうあれ、祖国に大国としての地位を再び取り戻そうとしているという噂が立つまでの間しかもたなかった。プーチンの初の大統領就任とともに、早くもロシアには西側、特にアメリカと独裁EUによって、再び敵のレッテルが貼られ、ロシアは潜在的な敵対者と見なされるようになった。

私はこれを、軽率で犯罪的な陰謀だと見なしている。というのも、これによって、ロシアは再び完全に孤立しかねず、また、新たな“冷戦”も生まれかねないからだ。さらに実際に、新たな戦争行為が起るという可能性も除外できないのだ。

クリミア半島とウクライナに関するプーチンの政策を、理性的な方法で批判することは可能だ。行動全体が、正当に行われているわけではないからだ。しかしこのことは、アメリカと独裁EUによってロシアに対し、愚かな制裁措置が取られる必要があることを意味するわけではない。そのような制裁措置は、ロシア国民と経済に損害を与え、また同時にヨーロッパの国民とアメリカ国民、またその経済にも非常に打撃を与えるような報復制裁措置をも招くことになる。

正しく判断するならば、独裁EUの権力者たちは、この点においても、さらに他の点においても、ロシアに関して軽率にも外交面での利益を度外視し、既に再びもろいものになっている世界平和を脅か

しているのだ。

独裁EUとアメリカにとっては、そしてこれは他の全ての国にも言えることだが、何が何でも自国の利益のみを追求することが重要なのであり、それに当たっては暴力、非論理性、強制という完全に誤った手段が絶対的に正当な正しいものと見なされている。

この点において間違いを犯している、責任ある地位にある権力者たちが口にする、高尚で聞き心地の良い言葉は、ことごとく嘘偽り以外の何物でもない。というのも、まことに彼らにとって重要なのは、権力を保持することのみだからだ。それも、国民に方針を指示されることはない。

しかし、国民を未熟でちっぽけな存在として抑え込むこれら全ての嘘とペテンにも関わらず、全ての西側諸国とロシアが、同じ船に乗っていることは事実なのだ。それは、世界全体にも言えることであり、従って、皆が同じ舵を使い、同じ方向へと船を操縦して行かなければならないのだ。

つまり、政治家、他の権力者、軍隊、科学者、宗教の全てに、そして全ての民族に、真の平和を押し進めることが求められているのだ。このことは同時に、全ての、例外なく全ての現存する対立をあらゆる点において終結させ全世界の状況を、平和を基礎に正常化させることを意味する。

これが私の見解だ。



無断複製・利用を禁止します。 著作権は一般社団法人 FIGU-Landesgruppe JAPAN に帰属します。

発行・販売元：社) フィグ・ランテスグループ・ヤーバン  
〒193-0823 東京都八王子市横川町 521 番 4 号  
TEL 042-686-1379 FAX 042-686-1378  
E-Mail info@jp.figu.org  
ゆうちょ口座記号番号：00150-9-275235  
口座名義：社) フィグ・L・ヤーバン